

〈新コラム〉エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第2回：星のおしえ

秋の冷たく澄んだ空気の中、天頂を仰いで星を眺めるのが楽しい今日この頃となりました。星といえば思い出すのは、小学生の頃に弟と「発見」したオリオン座。当時、星座の存在は知ってはいましたが、図鑑のページの上で星をあらわす点々の距離感と、実際の空に星が並ぶイメージが結びつかずにいました。ある夜、実に意味ありげに等間隔で並ぶ3つの星を見て「これが！もしかして…うわわわっ！！」と思ったあの高揚感は、いまでもオリオン座を見ると胸に甦ります。

星座と言えば星占い、みなさんは、血液型占いと星占いでしたら、どちらがお好みでしょうか。私は星占いに軍配をあげるひとりですが、こういう話をすると「心理の先生なのに?!」と驚かれることが多いです。私は心理学者ではありません！と前回カミングアウトいたしました。それでも社会科学という合理性と論理性をむねとする学者のはしくれでありながら、というお叱りはもっともではあります。

それでも私が星占いをこよなく愛する理由は、その相対性と象徴性にあります。皆様は「水星の逆行」をご存知ですか？小学校の理科で「すいきんちかもく…」と太陽の周りを回る惑星ファミリーの順番を覚えましたが、地球を含めたこれらの太陽の取り巻き一族は、1つの方向にぐるぐると回っていて、逆行するはずはありません。しかし、これは基準となる視点が太陽である場合の見え方でしかない、と占星術者は考えます。私たちの立ち位置、つまり地球から水星を見ると、地球も水星もそれぞれに動いているので、相対的な互いの位置関係は常に変動しています。そのため1年に数回、それぞれ数週間にわたって水星は、地球からみると逆方向に進んでいるように見えるんです！なんという大発見。

しかも、水星はコミュニケーションや通信を司っていますので、この星が逆行するということは、電気回路を含む世の中のあらゆる意思疎通のチャネ



おとめ座の愛犬ギネスとともに

ルが混乱することを意味します。水星逆行の時期に占星術師たちが会合を催すときには、世界各地から集まってきた占い師たちが口々に「インターネットで予約したはずのホテルの部屋が取れてなくて参ったよ」「エンジントラブルでフライトが遅れたから、乗り継ぎ便に間に合うかひやひやしたわ」「やっぱり水星逆行の時期は旅行するもんじゃないね」なんぞと言いつつそうです。なんというナンセンス…？

今月から大学では後期の授業が始まりましたが、毎学期のはじめは学生の相談が増えます。私が教員やアドバイザーという立場から見ても、彼女らの世界は、しかし同時に41才の安定志向のおばさんが見る21才の、希望も不安も満載の現実であったり、都会育ちの世間知らずである私が想像するにあまりある、故郷の東北で病氣療養中のお母さんを心配する切実な現実であったりします。不動の太陽を中心とした見方だけではなく、あなたとわたしの立ち位置が刻々と変化する、相対的な関係性のなかにも見つめるべき現実があること、私たちが現実だと思っていることは、「ある一つの」現実でしかなく、異なる象徴性を与えられることによって違って見えること。これらは、私が臨床心理学的な思考回路を頭の中で起動して問題を解こうとするとき、傍に携えていたいと考えている「星の教え」です。ちなみに、今年最後の水星の逆行は12月です。ご一緒に「星占い」の世界はいかがですか？

(高崎健康福祉大学講師、フォーラム協同研究者)